



JAAGA だより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町9番7号
ZEEKS 四谷坂町ビル3F
編集：JAAGA 事務局
印刷：東伸社
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

つばさ会 / JAAGA 訪米団 AFA 総会参加等報告 TSUBASA-KAI and JAAGA members participate in AFA general meeting



1 全般

つばさ会及び JAAGA 両団体による訪米事業は、コロナ感染症パンデミックの影響により昨年中止を余儀なくされ、今年、2年ぶりの訪米を実現することができた。しかし、参加予定者の殆どが所属会社の海外出張にかかる社内規定等によって参加が叶わず、杉山会長以下2名の訪米団の編成となったが、所期の目的を十分に達成することができたと思料する。

参加人員が限られていたことから、ハワイ経由で直接ワシントン入りする必要最小限の予定を組んだ計画となり、9月16日から25日まで9日間の訪米であった。この間、米空軍の要人との意見交換、米空軍協会(Air Force Association : AFA) 主催の「Air Space & Cyber Conference 2021」(ASCC2021)への参加並びに名誉会員等との交流行事を通じて、日米空軍種間の友好親善の更なる促進に寄与すると共に日米間で関心の高い事項に関する最新情報を入手することができた。

コロナ感染症に関わる様々な制約がある中でも訪米団を派遣し、対面で意見交換する機会を設けたことは、

米側関係者から好意的に受け止められると共に大いに歓迎された。困難な状況下でも訪米事業を実現することにより、JAAGAの強いコミットメントを示すことができたものとする。また、意見交換においても、焦点を絞り、突っ込んだ議論をすることによって、貴重な情報を引き出す事ができるなど、十分に有意義なものとなった。

ワシントン地区における JAAGA 名誉会員等との交流行事においては、歴代の第5空軍司令官経験者と共に、交代したばかりのシュナイダー中将ご夫妻を含め、在日米空軍勤務者等と旧交を温めることができた。また、AFA 主催の ASCC2021 に2年ぶりに会場で参加することができ、米空軍・米宇宙軍を主導するトップリーダー達の現状認識とビジョン等について理解することができたのは有意義であった。

2 JAAGA 訪米団の行動等の概要

(1) 期間：令和3年9月16日(木)～9月25日(土)

(2) 参加者：訪米団長 杉山良行 JAAGA 会長
(富士通株式会社)
団員 荒木淳一 JAAGA 理事
(川崎重工業株式会社)

(3) 訪問地並びに研修の概要等

ア ハワイ地区：9月16日(木)～18日(土)

(ア) 慰霊碑等訪問、献花(マキキ日本人墓地、パンチボール)

～ だより第61号目次 ～

つばさ会 / JAAGA 訪米団 AFA 総会等参加報告	1
在日米軍兼第5空軍司令官の交代	8
シュナイダー中將が名誉会員に	9
レッド・フラッグ・アラスカ参加隊員を激励	10
杉山会長 第18航空団司令官交代式に参列	13
日米相互特技訓練を激励・支援	15
SPORTEX '21-A	18
米空軍(宇宙軍)将校 航空自衛隊勤務だより	20
航空自衛隊コーナー	22

米空軍コーナー	25
賛助会員 投稿	28
投稿募集のご案内	29
JAAGA 理事の活動紹介「会員理事」	30
新入会員紹介	31
賛助会員の皆様へ	31
JAAGA グッズ紹介	31
会員募集	32
編集後記	32

(イ) 太平洋空軍 (PACAF) 司令官ウィルズバック大
将表敬及び意見交換

(ウ) インド太平洋軍 (INDOPACOM) 司令部幕僚長ジャ
ロード陸軍少将との意見交換

(エ) 太平洋統合ミサイル防衛センター (Pacific
Integrated Air & Missile Defense Center : PIC) 研修

(オ) 青木豊在ホノルル日本国総領事表敬

(カ) パールハーバー航空博物館研修

イ ワシントン地区：9月19日(日)～24日(金)

(ア) AFA 主催 ASCC2021 参加

(イ) 米空軍参謀本部部長等との意見交換

(ウ) 富田浩司駐アメリカ合衆国特命全権大使表敬

(エ) ASCC2021 参加企業ブース等の見学並びに意見
交換

(オ) JAAGA 名誉会員等との交流行事

3 成果の概要

(1) 全般

ア 対等の「戦略的競争」相手である中国とのハイエ
ンドの戦いを抑止し、勝利する為に、「戦力設計 (Force
Design)」レベルでの変革に戦闘コマンドから空軍省
レベルで取り組んでいる。徐々にではあるが、各取り
組みが進展、具体化している状況を確認できた。

イ 総じて米国は、中国に対する非対称な最大の優位
性として、同盟国、パートナー国などの存在を強く認
識し、これらとの協力・連携を今まで以上に重視して
いる様子であり、日本のより一層の戦略的かつ主体的
な対応が求められていると感じた。

(2) 細部

ア 「戦力設計」レベルでの改革は、一部で進展が見
られるものの、変革に対する組織内外からの抵抗や議
会からの予算的支援が得られないなどの問題に直面し
ている。特に、予算に関してはバイデン大統領に交代
後の初めての予算プロセスであり、米空軍/米宇宙軍
のニーズを前面に打ち出すことを控えて、慎重に出方
を伺っている様に感じられた。

イ 空軍省レベルでの優先事項は、統合全領域指揮・
統制 (Joint All Domain Command & Control : JADC2)
とそれを支える先端戦闘管理システム (Advanced
Battle Management System : ABMS) の追求である。
これに加えて、各主要装備品等の近代化を進めようと
している。同時に、人種・性別等に関わる差別やハラ
スメント等の問題解決に積極的に取り組んでいる様子

が確認できた。戦闘コマンドレベルでは、今直ぐに
実行できることとして、同盟国等との防衛協力、訓
練・演習等の拡大・強化を図ることによって「主導
権を握ること (Seize Initiatives)」を重視するととも
に、A2AD 脅威下における「機敏な戦闘展開 (Agile
Combat Employment : ACE)」の能力獲得を重視して
いる。

(3) 各地区ごとの成果

ア ハワイ地区

(ア) 主として、①「太平洋抑止イニシアティブ (Pacific
Deterrence Initiatives : PDI)」、②中国とのミサイル能
力等のギャップ、③ ACE 等に焦点を絞って意見交換を
実施した。



With Gen Wilsbach, Commander of Pacific Air Forces, at the
HQ, PACAF

(イ) PDI に関しては、欧州正面のロシアに対する抑
止イニシアティブ (European Deterrence Initiatives :
EDI) との比較において、十分な予算措置がなされて
いないことから、具体的な能力整備が進まないこと
に不満を感じているようであった。インド太平洋軍
司令官アクイリノ海軍大將を含めて主要幹部が議会
等に働きかけているものの、国防接受法 (National
Authorization Act : NAA) に規定されており、修正は
容易ではないとの認識であった。

(ウ) 中国とのミサイル能力のギャップに関しては、
十分に認識しているものの、まずは目の前の長射程の
攻撃能力 (空対空、空対地) の獲得や早期警戒管制機
(AWACS) の更新など、直ぐに取り組める現有能力の
近代化・強化を進めたいように感じられた。

(エ) インド太平洋軍司令官アクイリノ海軍大將は、
インド太平洋軍の焦点を「優位性の再獲得 (Regain
Advantage)」から、「主導性の獲得・維持 (Seize
Initiatives)」へと転換している。中国に対する非対称

な優位性である同盟国・友好国との連携を梃子にするため、共同訓練・演習等の頻度・規模・期間を拡大し、現実的な戦術能力の向上を図ろうとしている。「中国対全ての国々」という構図作りを目指しており、太平洋地域空軍参謀長等シンポジウム（Pacific Air Chiefs Symposium：PACS）における災害救援活動（Disaster Relief：DR）に関する机上演習（Table Top Exercise：TTX）での成果を高く評価していた。

（オ）ACE は、2 年前に説明を受けたような単なる机上の概念から、具体的な作戦能力として着実に進展しており、A2AD 脅威に対する重要な作戦構想となりつつある。域内国と共同で ACE を実施するために、戦術・技術・手順（Tactics / Technique / Procedure：TTP）を整備する必要があるとしている。ACE に関しては実際の演習「Pacific Iron」等でも、演練し能力を向上させており、近いうちに初期の作戦可能能力（Initial Operation Capabilities：IOC）の達成、数年以内に最大作戦可能能力（Full Operation Capabilities：FOC）を獲得する見通しを示している。ACE 実行の鍵は、広大な太平洋地域における①後方・補給、②指揮・通信（特に分散した戦力に対する ATO の配信）、③実際の指揮・統制要領（24 時間態勢で C2 と航空作戦センター（Air Operation Center：AOC）を連結すること）であるとしている。更に重要なポイントとして、マルチな技能を發揮できるエアマンの養成が必要であるとしており、空自の「飛行場群構想」と同様の課題が認識され、各種の取り組みが始められている。

（カ）PIC においては、統合防空ミサイル防衛（Integrated Air and Missile Defense：IAMD）に関するセミナーや訓練・演習等を関係国との連携強化のツールとして活用を図っている。BMD に関する日本の能力向上を高く評価するとともに、域内関係国軍との連携において、日本に「橋渡し」的役割を果たすことへの期待は大きかった。PIC に関与する国の中には台湾も含まれており、法的に様々な制約はあるものの台湾との連携強化にも PIC を活用しているようである。

（キ）青木豊在ホノルル総領事を表敬訪問し、著名な日本食シェフによる心尽くしの料理を頂きながら、意見交換する機会を得た。コロナ禍におけるハワイの現状のみならず、中国問題、アフガン問題、インド太平洋軍主要幹部との交流など幅広い視点から示唆に富む所見を伺うことができた。また、ハワイに勤務する自衛官に対して日頃から様々なご理解とご支援を頂いてお

り、感謝申し上げたい。

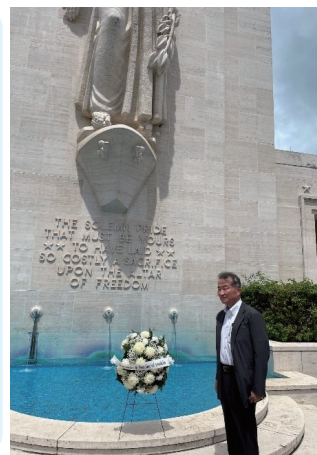


Dinner with Mr. Yutaka Aoki, Consulate General of Japan in Honolulu and his staff at their official residence



↑ Having a familiar talk with President of Hawaii Meijikai, Kenneth Takao Saiki, Capt, U.S. Navy(Ret.), after offering of flowers at Makiki Japanese Cemetery

→ President Sugiyama offers flowers at National Memorial Cemetery of the Pacific (Punchbowl Cemetery)



← Listening to the explanation by a tour guide at Pearl Harbor Aviation Museum

イ ワシントン地区

主として、① JADC2、② ABMS を中心に意見交換を実施するとともに、米空軍／米宇宙軍の問題認識や変

革への取り組み等に関して情報収集に努めた。なお、ASCC2021のセッションの合間に、ゲイロード・ホテル内の会場にて米空軍参謀本部の部長クラスとの意見交換を実施した。

(ア) ASCC2021直前に空軍長官に着任したケンドール長官は、上院で10年以上中国の軍事的脅威に警鐘を鳴らしてきており、中国の軍事的脅威動向を強く懸念している。中国の脅威を抑止し、打破する為には変革が必要であり、空軍省内並びに議会との「One Team One Fight (OT/OF)」の取り組みを求めている。冷戦期に較べて、米空軍／米宇宙軍ともに、同等の能力を持つ相手との競争に慣れていないこと、組織としての記憶 (Muscle Memory) が失われていることを懸念している。

中国との戦略的競争を抑止し、勝利する為には変革が必要である。他方で、追求する変革の作戦運用上の具体的なメリット、目に見える効果を示さなければならぬとして、空軍省内の「変化の為の変化」を戒めている。その一例として、空軍のABMSプログラムがB-21開発プロジェクト等と比較して、具体的な効果、軍事的な優位性が見えない点を批判している。

他方で、変革のための資源や時間が限られていることにも不満を感じている。特にレガシー・プラットフォーム (A-10等) を維持することによって、戦力の近代化や更新の為に必要な貴重な資源と時間が失われていることに強い懸念を表明している。自身の講演では、議会に「OT/OF」を呼びかけるに止めているが、ASCC2021に先立つ記者会見では、冷戦後に米国内での基地の再編と閉鎖を進めた包括法案 (Base Realignment and Closure : BRAC) のような取り組みに意欲を示している。

空軍内に人種等に起因する差別やハラスメントに関わる悪しき組織文化が残っていることに強い問題認識を有しており、多様性、包摂性をもった組織文化に変えなければならぬとしている。

(イ) 米空軍参謀総長ブラウン大將は、自身の講演において、「Impossible」(不可能) という言葉を信じない者だけが、歴史的偉業を成し遂げてきたこと (ライト兄弟、C・イェーガー、黒人パイロット等) を紹介し、変革への意識を組織文化として根付かせようとしている。

自らが就任時に掲げた「変化を加速させるか、負けるか」(Accelerate Change or Loose : ACOL) の方針に

沿った様々な進展はあるものの、未だに組織内の官僚主義や、資源・マンパワー・時間が足りない事を理由に、変革ができないとする風潮を変えなければならないとの強い想いが感じられる。



With Gen Brown, Chief of Staff of the U.S. Air Force and Maj Gen Sugai, Defense Attaché of Japan to the U.S. at ASCC2021 Hall

特に議会に対しては予算等に関する要望は一切口にせず、予算・資源・時間が無くてもマインドセットや組織文化が変われば、空軍の変革は可能であるとの認識を強調している。

軍事産業との関係については、今までの関係では大国間の戦略的競争には対応できないとして、小さくても突出して優れた企業やスタートアップ企業との連携を通じて、軍事産業等との関係を見直し、技術の進展スピードに遅れない装備品の開発や調達を目指そうとしている。

戦略的競争相手である中露の評価やインド太平洋地域の戦略的重要性などを説明し、変革を加速させなければならない背景の理解を浸透させるとともに、同等の敵との「競争 (Competition)」であることを強調している。

(ウ) 米宇宙軍作戦部長であるレイモンド大將は、創設間もない米宇宙軍における様々な進展を具体的に紹介していた。宇宙領域における新たな軍種が確かな船出を果たし、着実に体制が整いつつある状況を理解できた。

米空軍の教育・訓練課程をベースにしているとはいえ、既に基本軍事訓練 (Basic Military Training : BMT) 課程や軍事専門教育 (Professional Military Education : PME) 課程 (SOS, ACSC, AWC等) の幾つかを、宇宙に特化した内容で進めており、宇宙

軍に必要な専門性を持った人材の育成を自らの手で
行おうとする強い意欲を感じた。

また、各教育・課程の最初の段階で、より具体的な
脅威を認識させるため、情報セキュリティを確保した
上で、脅威に関する教育から始めている点は、米空軍
の教育・訓練の思想を踏襲しているものと考えられる。
米宇宙軍のドクトリン、モットー「SEMPER SUPRA」
(Always Above のラテン語)、「宇宙軍人の理想」
(Guardian Ideal) と題した教本等、組織の基本思想、
その根拠となる考え方等を短時間に整備できるのは、
組織の知的能力の高さを示すものである。

宇宙軍の任務や勤務の特性を活かし、従来は軍に採
用されなかった疾病を抱える者でも採用し、能力発揮
させるという考え方を採っており、他軍種に無い大き
な組織的な魅力になり得る。少数精鋭の優秀な人材を
抱え、最先端の技術を扱い、社会生活にとっても極め
て重要な宇宙領域において、国の為になることに自分
が関与できるというメッセージは、募集への大きなア
ピールとなるはずである。

(エ) 米空軍参謀本部 A-5 副部長 (戦力設計担当) ハ
リス少将及び (ABMS 担当) ヴァレンゼリア准将とは、
ABMS、JADC2 等に関して意見交換を実施することが
できた。

ABMS に関して、ケンドール長官は可能性や考え方
そのものを否定している訳ではなく、選択する技術、
具体的な優位性をしっかり説明することが必要である
と認識していた。

最終的には、JADC2 が目指す「決心の優位性」が具
体的に何を指すのかを明確にする必要があるとしている
が、JADC2 は領域を跨ぐだけではなく、国も跨ぐ可
能性があり、データの所有権が問題になると考えてい
る。純粹に作戦運用上の話だけではなく、国の事情で
ネットワーク内のデータに政治的、法的制約が掛かる
ことも想定しており、18 か月の実証実験の結果を踏
まえて、同盟国との協議も開始すると述べている。

陸軍の「Project Convergence」及び海軍の「Project
Overmatch」は、空軍の ABMS と共に JADC2 を支
えるシステムとして相互補完的に併存すると想定してい
るようである。ABMS は Internet of Military Things
(IoMT) の一環として捉えることは可能であるが、ネッ
トワークの組み方は、複数のループ、ネットワークを
必要な時に必要な相手とだけ接続し、必要な情報だけ
をやり取りするなど、従来と異なるやり方、発想が不

可欠であるとしている。

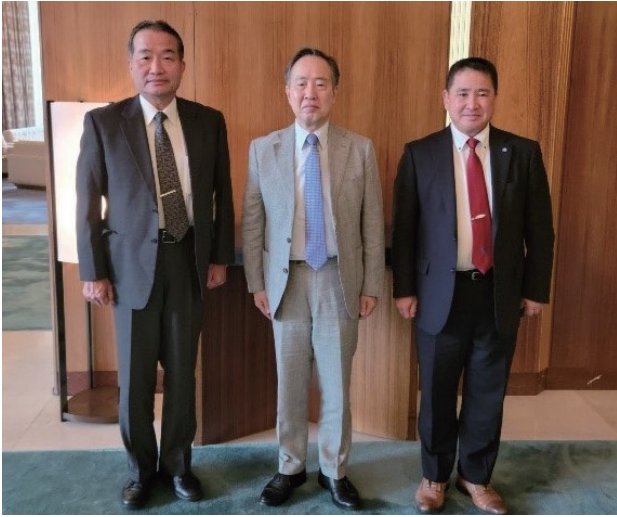
ABMS に必要な技術は既に存在しており、技術的な
課題がハードルではなく、TTP を含めた運用の考え方
を明確にすることが課題である。LINK-16 も ABMS に
組み込まれるが、今のままでは敵に位置を暴露するだ
けなので、ソフトウェア改修が必要であるとしている。
(オ) A-2 副部長シンプソン少将との意見交換を通じて、
JADC2 / ABMS の進展に対して、情報分野でも今まで
の考え方に捉われず、違ったアプローチが求められて
いるという認識が示された。他方で、ISR に関わる情報・
データの多くを米空軍 / 米宇宙軍が担っているという
自負も感じられた。

同盟国や友好国との情報共有に関しては、米国のや
り方を押し付ける傲慢なやり方を見直す必要があると
自ら述べており、同盟国、友好国との情報共有を重視
する考えが浸透しているように感じた。他方で、情報
分野においても日本が果たすべき役割に関して期待は
大きいものの、実際の具体的な取り組みが見えないこと
に対する不満も感じられた。

(カ) A-8 副部長ネホン中将との意見交換を通じて、米
空軍の装備体系に関して様々な意見交換を実施するこ
とができた。米空軍も各機種、各機能で近代化や換装
の時期を迎えているものの、国家防衛戦略の転換に伴
い中国とのハイエンドの戦いに勝利する為の対応や予
算の制約など様々な要件が絡んでおり、単純な機種更
新ではなく様々な選択肢を考えているようであった。
米空軍の戦闘機と爆撃機の戦力組成を大きく変えるこ
とは考えていないが、爆撃機は新たな E/G に換装する
B-52 と機数を増やす B-21 が主体となると述べている。
他方で、JASSM / LRASM のような長射程の打撃力の
量が不足しているのが課題であるとの発言があった。

長距離打撃力を有効に発揮するには、戦闘域の最前
線でキル・チェーンを完結しなければならず、日本の
JADGE や宇宙領域からのデータ供給が重要であるとし
て、日本との連携に期待感を持っていた。

また、老朽化した AWACS の更新を検討している旨
の発言があったが、新しい機種なのか、新しいシステ
ムなのか、に関して明言はなかった。次世代制空シス
テム (Next Generation Air Dominance: NGAD) に関し
ては、F-22 を超える制空の為の「システム」と述べて
おり、プラットフォーム・機体そのものだけではない
新たなシステムと考えているようである。機体以外に
如何なる機能やエレメントをどのように組み合わせ



Courtesy call on Mr. Koji Tomita, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of Japan to the United States of America

制空システムとするかについても明言は無く、今後の関連情報に注目する必要がある。

(キ) ASCC2021 の合間に、富田浩司駐米大使を表敬訪問する機会を得ることができた。日米豪印 (QUAD) の首脳会談に参加する総理大臣受け入れの準備等でお忙しいところ、貴重なお時間を頂き、バイデン政権の対中スタンスや米軍のアフガン撤退問題など、示唆に富む所見を伺うことができ、大変有意義な時間であった。改めて富田大使のご厚情に感謝したい。

(ク) JAAGA 名誉会員等との交流活動に関しては、例年行っているゴルフは前日の大雨の為、コースが閉鎖となり、残念ながら中止となった。

名誉会員等との夕食会は Army Navy Country Club において、米側 12 名、日側 4 名の参加により、終始和やかに実施され、ご夫人を含めて旧交を温めること

ができた。名誉会員からは、ライト退役中将ご夫妻 (Lt Gen(Ret.) & Mrs. Wright)、アンジェレラ退役中将 (Lt Gen(Ret.) Angelella)、ドーラン退役中将 (Lt Gen(Ret.) Dolan)、シュナイダー中将ご夫妻 (Lt Gen & Mrs. Schneider) が参加された。名誉会員以外からは、長年にわたって JAAGA と親交を深めてこられた元米空軍参謀総長シュワルツ退役大将ご夫妻 (Gen(Ret.) & Mrs. Schwarz)、ご多忙なスケジュールを工面して下さった米宇宙軍作戦部長レイモンド大将ご夫妻 (Gen & Mrs. Raymond)、元 18 航空団司令官 (嘉手納基地司令) ウィリアムズ退役少将 (Maj Gen(Ret.) Williams)、元 35 戦闘航空団司令官 (三沢基地司令) ロースタイン退役少将 (Maj Gen(Ret.) Rothstein) にも参加いただいた。また、防衛駐在官菅井裕之空将補ご夫妻も加わってくださった。

会の初めに、米側を代表してシュワルツ退役大将から歓迎のご挨拶があり、その後、杉山会長から今回の訪米実現にあたっての苦労や成果などが披露された。僅か 2 名の訪米であったものの、JAAGA が名誉会員等との交流の場を持ったことに対して、温かい労いの言葉と感謝の気持ちが示された。

参加された 4 名の奥様を含めて、全員で日本勤務時の思い出を披露し、話が尽きないなど、日米友好の礎は日本での生活や様々な交流を通じて築かれることを改めて実感した。同時に名誉会員等との「絆」を維持・強化するためには、継続的かつ定期的な交流が不可欠であることも再認識した。

会の終了後、ライト名誉会員ご夫妻のご自宅に招待され、テラスから夜景を眺めながらウィスキーを楽し



Japan-America Air Force Goodwill friends enjoy reunion dinner at Army Navy Country Club



Lt Gen(Ret.) Wright, an Honorary Member of JAAGA, and his wife welcome friends from Japan at their home after dinner at Army Navy Country Club

みつつ、更に懇親を深めることができました。

(ケ) ASCC2021 の展示ブースにおいて、各種装備品等の展示を見学すると共に、ボーイング社の T-7 (Red Hawk) のシミュレータに試乗することができた。

同社技術者から詳細な説明を受け、第 5 世代機への移行を強く意識した非常に多機能・高性能な機体であることを実感した。他方で、操縦教育・訓練を受ける学生の経験・資質によっては、情報処理や操作などでオーバーフローすることも懸念されると感じた。

カナダの飛行教育・飛行訓練等の支援器材を扱う CAE (Canadian Air Education) 社の技術者との意見交換を通じて、世界の飛行教育・飛行訓練を支援する器材等の進展と空自との差を痛感した。



President Sugiyama sits in the front seat of T-7 simulator and receives instruction from Boeing technical specialist in charge of the booth



President Sugiyama and Director Araki at the entrance gate of ASCC2021 Hall

以上のように、新型コロナ禍の影響はあったものの、大変有意義な訪米であった。

荒木 (淳) 理事記

参考：【つばさ会 / JAAGA 訪米団の行動等概要抜粋】

期 間	9月16日(木)～25日(土)
参加者(2名)	団長：杉山会長(富士通株式会社) 団員：荒木理事(川崎重工業株式会社)
訪問地及び期間	研修概要等
ハワイ地区 (9/16～18)	<ul style="list-style-type: none"> ・慰霊碑等訪問、献花(マキキ日本人墓地、パンチボール) ・太平洋空軍(PACAF)司令官ウィルズバック大将表敬及び意見交換 ・インド太平洋軍(INDOPACOM)司令部 幕僚長ジャラード陸軍少将との意見交換 ・太平洋統合ミサイル防衛センター(Pacific Integrated Air & Missile Defense Center: PIC) 研修 ・青木豊在ホノルル日本国総領事表敬 ・パールハーバー航空博物館研修
ワシントン地区 (9/19～24)	<ul style="list-style-type: none"> ・AFA 主催 ASCC2021 参加 ・米空軍参謀本部 部長等との意見交換 ・富田浩司駐アメリカ合衆国特命全権大使表敬 ・ASCC2021 参加企業ブース等の見学並びに意見交換 ・JAAGA 名誉会員等との交流行事

在日米軍兼第5空軍司令官の交代

The U.S. Forces Japan and 5th Air Force Change of Command ceremony in Yokota AB

8月27日(金)、米軍横田基地において、米インド太平洋軍司令官アクイリノ海軍大将(Adm John Aquilino)及び米太平洋空軍司令官ウィルズバック大将(Gen Kenneth S. Wilsbach)による執行の下、在日米軍兼第5空軍「Change of Command」式典が挙

行された。
同式典ではまずアクイリノ海軍大将が「在日米軍と日本の自衛隊との絆は、私たちが世界で築いてきた最も強固で重要な関係のひとつであり、共有する深い価値観は、永続的な友情の中心であり、同盟の真の強さでもある。我々が共に日々行っている多大な活動は、ルールに基づく国際秩序を維持するものだ」とスピーチした後、離任するシュナイダー中將(Lt Gen Kevin B. Schneider)の功労と日本への貢献を称え、アクイリノ海軍大将からシュナイダー中將へ国防殊勲賞が贈られた。



Admiral John C. Aquilino, U.S. Indo-Pacific Command commander, speaks during the U.S. Forces Japan and 5th Air Force change of command ceremony

その後、シュナイダー中將から、在日米軍司令官旗がアクイリノ海軍大将に、第5空軍司令官旗がウィルズバック大将にそれぞれ返納され、次に両司令官から新司令官ラップ中將(Lt Gen Ricky N. Rupp)に2つの指揮官旗が授与されて、在日米軍司令官及び第5空軍司令官の指揮権移譲は、厳粛裏に終了した。

離任するシュナイダー中將はスピーチにおいて、参



Admiral Aquilino presents the Defense Distinguished Service award to Lt Gen Kevin B. Schneider

列者への感謝の意に続いて、「2年半前、私はここに立ち、日米同盟の重要性と、米国が持つ最も重要な同盟と戦略的関係について申し上げた。そして、2年半の勤務を終えた今、私は再度さらに強調するとともに信念を持って、同じことを申し上げる」と述べた。

続いて、新司令官ラップ中將は、参列者への感謝のあと、「兵士たちを統率し、日本という素晴らしい同盟国と協力し、両軍の準備と戦闘能力を向上させることへの皆様の信頼と信用を大変光榮に思っている。



Joint U.S. Forces Japan color guard members present the colors during the USFJ and 5th Air Force change of command ceremony

Admiral Aquilino passes the U.S. Forces Japan guidon to Lt Gen Ricky N. Rupp



Admiral Aquilino passes the U.S. Forces Japan guidon to Lt Gen Ricky N. Rupp

Gen Kenneth S. Wilsbach, Pacific Air Forces commander, hands over the 5th Air Force guidon to Lt Gen Ricky N. Rupp



Gen Kenneth S. Wilsbach, Pacific Air Forces commander, hands over the 5th Air Force guidon to Lt Gen Ricky N. Rupp

また、共同体としての強さや戦略的パートナーシップ及び即応性を維持し、親密な友情をさらに深めるために協力することを楽しみにしている」と述べ締めくくった。

(浅井理事記)

(Photos from 5th AF HP)



Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan and 5th Air Force commander, speaks during the USFJ and 5th AF change of command ceremony



The official party stands at attention during the U.S. Forces Japan and 5th Air Force change of command ceremony

シュナイダー中将が名誉会員に JAAGA asks Lt Gen Kevin B. Schneider to be an Honorary Member

8月27日(金)に開催された在日米軍兼第5空軍司令官交代式終了後、会長からシュナイダー中将に対し、JAAGA 名誉会員委嘱記念盾が贈呈された。式典には、JAAGA から杉山会長、丸茂顧問、武藤理事が参加しており、式典終了後、杉山会長からシュナイダー中将に対し、米空軍と航空自衛隊の相互理解と友好親善に寄与していただいたことへの謝意と、今後は名誉会員として日米両国の親善の架け橋になっていただくことを要望し、委嘱記念盾が贈呈された。



Lt Gen Kevin B. Schneider receives commission from President Sugiyama to become an Honorary Member of JAAGA

ごし、のちに、三沢基地でF-16を操縦する若手パイロットとしての経験を経て、2019年2月5日から在日米軍と第5空軍を指揮し、日米同盟の最前線に立ち、各種演習の実施や日本政府との緊密な連携を通じて地域の安全保障の強化に努めながら、54,000人の在日米軍の軍人・軍属の活動を監督した。特筆すべきは、COVID-19パンデミックの際に、10万人以上の米軍関係

シュナイダー中将は、インド太平洋軍の参謀総長を務めた経験を持つ。3,800時間の飛行経験を有し、また「不朽の自由作戦」、「イラクの自由作戦」で



(From right) President Sugiyama, Honorary member Lt Gen Schneider, Adviser Marumo, Director Muto

530時間の戦闘飛行を行った最上級操縦士である。日本勤務がはじめてではないシュナイダー中将は、海軍の将校だった父親の関係で横須賀において幼少期を過

者、扶養家族、国防総省の民間人、受入国の従業員への自主的な予防接種を実施したことであった。

シュナイダー中将は、令和3年8月10日付けで旭日大綬章の栄に浴され、8月25日(水)には、防衛省において叙勲伝

達式が実施された。心よりお慶び申し上げますとともに、今後益々のご活躍を祈念するものである。

JAAGA 名誉会員は、今回新たにシュナイダー中将が加わり 20名となった。

(浅井理事記)



Lt Gen Kevin B. Schneider was conferred Grand Cordon of the Order of the Rising Sun

レッド・フラッグ・アラスカ参加隊員を激励 JAAGA cheers Koku-Jieitai participants to RED FLAG-ALASKA 21-2



Participants of RED FLAG-Alaska 21-2 stand together for a group on the flight line at Joint Base Elmendorf-Richardson, Alaska, on June 25, 2021 after completing the exercise (from 5th AF HP)

5月27日(木)、小野理事長、山田理事が航空総隊司令官内倉浩昭空将を訪問し、レッド・フラッグ・アラスカ (RED FLAG-Alaska) 訓練に参加する部隊に対する JAAGA からの激励品を手交し、訓練の成功を祈念した。



JAAGA Chairman Ono and Director Yamada call on Lt Gen Uchikura, Commander of Air Defense Command & Maj Gen Araki, Chief of Staff, in Yokota AB on 27 May 2021

内倉司令官から、JAAGA からの支援に対する謝辞に加え、「コロナ禍における感染防止及び訓練準備は様々な苦心はあるものの、非常時における活動に関して資となるものが大であった。現在の安全保障環境の中での共同訓練は、米空軍との共同対処能力及び信頼関係の更なる進化が期待できるものである」とのコメントがあった。

本訓練は、米空軍が実施する演習に参加し、日米共同訓練を実施することにより、部隊の戦術技量及び日米共同対処能力の向上を図ることを目的とし、6月1日(火)～7月3日(土)(うち、レッド・フラッグ・アラスカ期間：6月11日(金)～6月26日(土))の期間、米国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエリメンドルフ・リチャードソン統合基地並びに同周辺空域等において実施された。訓練参加部隊は第9航空団(那覇)、警戒航空団(浜松)、訓練規模等は、人員約170名、航空機 F-15J/DJ × 6機、E-767 × 1機であり、防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練、対戦闘機戦闘訓練、空中給油訓練等が行われた。

(山田理事記)



Members of Koku-Jieitai RFA team receive gifts for successful training from JAAGA in Eielson AFB

寄稿 レッド・フラッグ・アラスカ21-2に参加して①

訓練実施部隊指揮官
第9航空団飛行群司令 1等空佐 稲留 智

JAAGAの皆様におかれましては、この災禍の中にあっても、益々ご清栄のことと存じます。

レッド・フラッグ・アラスカ21-2は、6月11日から26日までの約2週間、米国アラスカ州のイェルソン空軍基地及びエレメンドルフ・リチャードソン統合基地並びに同周辺空域において実施されました。今回、新型コロナウイルス感染症の影響で規模が縮小され、人員は約170名、航空機は航空総隊から第9航空団のF-15J/DJ（6機）と警戒航空団のE-767（1機）が参加しました。演習中、感染拡大防止に係る航空自衛隊独自の制約がありましたが、米側の快い対応により、訓練を円滑に実施することができました。訓練では、アラスカという恵まれた訓練環境下において、戦闘計画の立案から発進、帰投、教訓の案出に至る一連の訓練を対抗形式で演練し、部隊の戦術技量と日米共同対処能力を向上させたほか、日頃の訓練の妥当性を確認するとともに、今後の運用の資を得ることができました。

諸制約下の演習ではありましたが、参加した隊員一人ひとりが訓練で得た成果をもって、それぞれの部隊において活躍し、ひいては日米両国の信頼関係向上に寄与してくれることを確信しています。

むすびに、貴会の継続したご支援に感謝申し上げますとともに、会員皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



Members of Koku-Jieitai medical team do training at a USAF simplified doctor's office in Eielson AFB



Koku-Jieitai and USAF specialists in aviation operations coordinate flight plan in Eielson AFB



USAF loaders carry out materials from Koku-Jieitai KC-767 in Eielson AFB



A Koku-Jieitai F-15 receives fuel from USAF KC-135



A Koku-Jieitai maintenance specialist refuels a F-15 from USAF tank truck in Eielson AFB



“Bond of Trust” between a pilot and a maintenance specialist during post flight check in Eielson AFB

写真提供：航空自衛隊（Photos by Koku-Jieitai）

寄稿 レッド・フラッグ・アラスカ21-2に参加して②

早期警戒機訓練隊長

警戒航空団第 602 飛行隊長 2 等空佐 小川 洋司

JAAGA の皆様におかれましては、本演習に際して、格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

本演習は、アラスカという制約が少ない広大な空域において、様々な性能を有する多数の航空機とともに訓練ができる貴重な機会でした。早期警戒管制機訓練隊は、E-767 を運用するとともに、航空自衛隊機に対する兵器管制と米軍アセット等に対する目標情報提供を行う指揮統制の役割を担いました。参加した隊員は、多数の航空機が飛行する中で、各アセットの任務遂行状況を把握しながら E-767 の機能を発揮し、クルー一丸となって演習に臨みました。演練の積み重ねにより、隊員及びクルーの技能並びに部隊の戦術技量を向上させるとともに、実戦を通じて培われた米軍の知識や技術を習得することにより相互理解を深め、戦術面における日米の相互運用性を向上させることができたものと考えます。

むすびに、JAAGA の皆様をはじめとする様々な方のご支援とご協力により、貴重な機会と所望の成果を得ることができました。ここに改めて感謝申し上げます。



A Koku-Jieitai E-767 makes a takeoff from Joint Base Elmendorf-Richardson (JBER)



A maintenance specialist guides the E-767 after landing in JBER



A C-2, which supports the deployment of Koku-Jieitai RFA team for the first time, lands at Eielson AFB



Two Koku-Jieitai maintenance specialists refuel an E-767 from USAF tank truck in JBER



Koku-Jieitai F-15 pilots visit 18th Aggressor Squadron, 354th Operations Group, Eielson AFB

写真提供：航空自衛隊 (Photos by Koku-Jieitai)



クリスマスツリー・
雪だるま
作：宇山佳男 OB

杉山会長 第 18 航空団司令官交代式に参列

President Sugiyama attends the 18th Wing Change of Command Ceremony

令和 3 年 7 月 16 日（金）、嘉手納基地において、第 5 空軍副司令官及び太平洋空軍統合航空調整所長であるコシンスキー少将（Maj Gen Leonard J. Kosinski）主催による第 18 航空団司令官の交代式「Change of Command」が挙行された。

同式典は、嘉手納基地第 353 特殊作戦群格納庫で行われ、沖縄防衛局長、沖縄県副知事及び周辺自治体の長、航空自衛隊からは南西航空方面隊司令官尾崎義典空将、第 9

航空団司令高石景太郎空将補、南西航空警戒管制団司令松崎勇樹空将補、その他基地協力会関係者などの招待者が参列した。JAAGA からは、杉山会長、丸野沖縄支部長が参列した。

今回の式典はコロナの影響で 270 名程度と少な目の参列者であった。



Brig Gen Eaglin, new 18th Wing commander with President Sugiyama and Okinawa Branch Head Maruyama

来賓歓迎及び紹介、関係者入場、日米両国国家独唱、祈祷ののち、コシンスキー少将が退任司令官及び新任司令官について紹介し、引き続き退任されるキャリー准将（Brig Gen Joel L. Carey）に勲章を授与した。

指揮権移譲は、司令官旗が退任されるキャリー准将からコシンスキー少将に返納され、その後、コシンスキー少将から新第 18 航空団司令官エグリン准将（Brig Gen David S. Eaglin）に授与され、厳粛裏に終了した。



(Photo from 5AF HP)

(from left) Maj Gen Kosinski, 5th Air Force deputy commander, Brig Gen Carey, outgoing 18th Wing commander and Brig Gen Eaglin, incoming 18th Wing commander

退任されるキャリー准将はスピーチにおいて、日本及び周辺自治体、陸海空自衛隊、部下、家族へのお礼の言葉を丁寧に述べ、感謝の意を表していた。キャリー准将は、ドイツのラムシュタイン空軍基地作戦連合軍航空司令部運用副参謀に就任する予定である。



(Photo from 5AF HP)

新司令官エグリン准将は、参列者への感謝の意を述べた後、「日本のパートナー

Maj Gen Kosinski, 5th Air Force deputy commander(left), passes the 18th Wing guidon to Brig Gen Eaglin(right), incoming 18th Wing commander, during a change of command ceremony

シップやリーダーシップに感謝するとともに、日米関係を前進させることを楽しみにしている。第 18 航空団は地域の一人として、地域の皆さんに手を差し伸べる準備ができている」と挨拶した。

エグリン准将は、在韓米空軍オーサン基地の第 7 空軍副司令官及び航空部隊本部参謀長からの就任であり、戦闘機パイロットである。



U.S. Air Force Airmen remove Brig Gen Carey outgoing 18th Wing commander's name from an F-15C Eagle to reveal Brig Gen Eaglin incoming commander's name during a change of command ceremony

(Photo from 5AF HP)

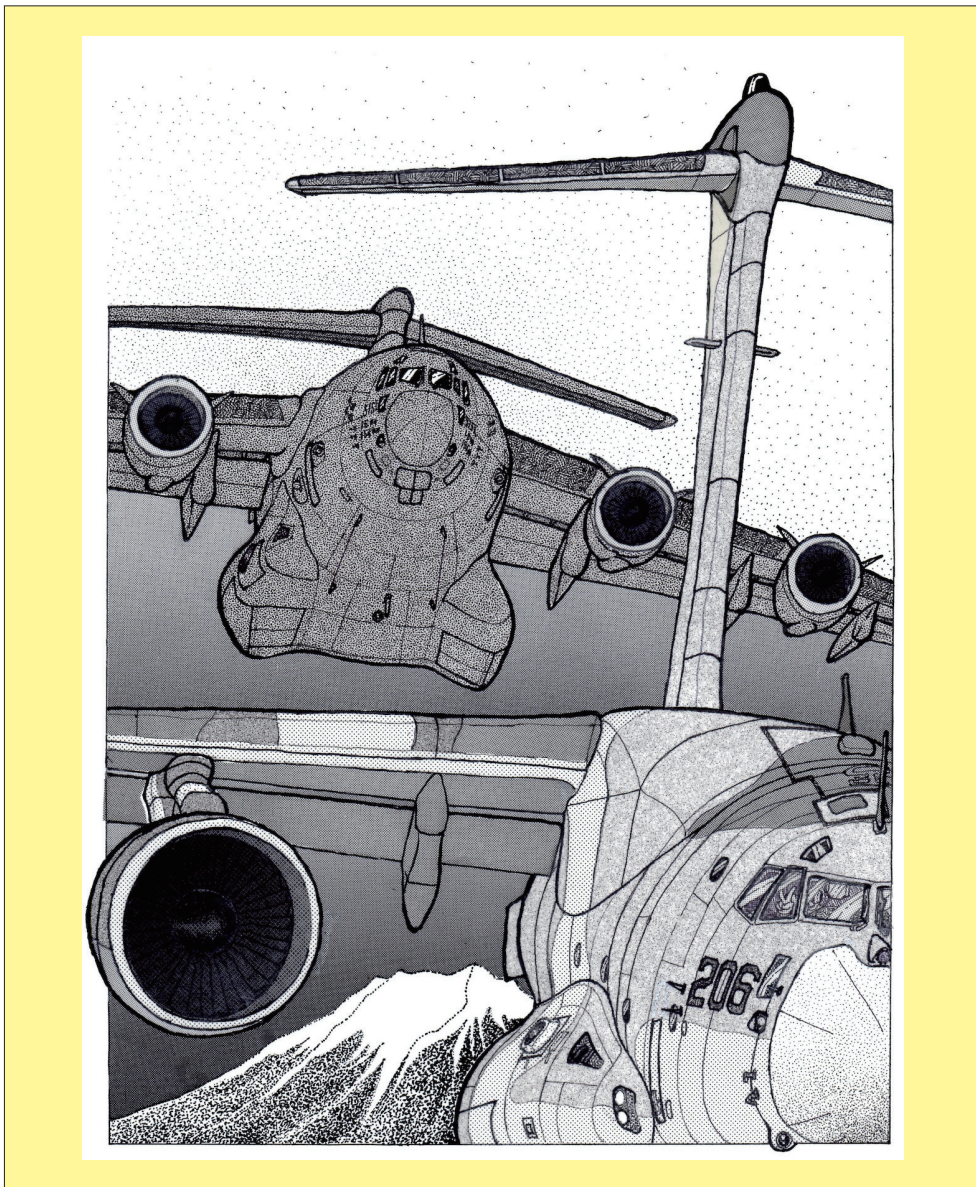


President Sugiyama with commanders : (from left) Lt Gen Ozaki, Southwestern Air Defense Force, Maj Gen Takaishi, 9th Air Wing and Maj Gen Matsuzaki, Southwestern Aircraft Control & Warning Wing



At the reception : (clockwise) President Sugiyama, Lt Gen Ozaki, Mr. Maruyama, head of Okinawa Branch and Maj Gen Takaishi

式典後の下士官クラブでのレセプションは、新司令官ご夫妻が招待者一人一人と挨拶を交わすとともに記念写真に応じる等、終始和やかな雰囲気で行われた。(丸野沖繩支部長記)



C-2 & C-17
作：富岡幹博会員

日米相互特技訓練を激励・支援

JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program



JAAGA Chairman Ono and Directors call on Maj Gen Ogasawara, Director, Personnel & Training Department of Air Staff Office and Warrant Officer Sugimoto, President of “RENGO-JUNSOUKAI” in Ichigaya AB on 30 Sep 2021

令和3年9月30日(木)、小野理事長(山田企画理事、太田広報理事同行)が、日米相互特技訓練の支援のため、航空幕僚監部(以下「空幕」という。)に人事教育部長(以下「人教部長」という。)小笠原卓人空将補を訪ねた。また今回別室における「贈呈式」という形で、人教部長はじめ関係主要幹部臨席の下、支援品の目録を航空自衛隊連合准曹会(以下「准曹会」という。)会長杉本孝哉准空尉に手交した。

小笠原人教部長との懇談には、教室長野村信一1等空佐、個人訓練班長田中慎吾1等空佐(当時)も同席され、和やかな雰囲気の中で懇談が行われた。まず、小笠原人教部長から、これまでのJAAGAによる各種支援に対する謝意が述べられるとともに、空幕におけるコロナ禍への対応として、グループ交代勤務やリモート会議の活用といった新たな業務遂行の様子が話された。また、田中個人訓練班長からは、日米相互特技訓練の調整状況として、10月上旬の1週間、那覇基地への米空軍人受け入れが実現する運びとなったこと、以降の訓練は日米双方で検討・調整中であることなどが話された。

小野理事長からは、コロナ禍の中でも、困難な任務に肅々と立ち向かい、見事に完遂していく自衛隊に対し心からの敬意が表され、また自衛隊退職後、自衛隊の教育、とりわけ新隊員教育の素晴らしさを再認識したことから、教育体系の見直しや組織の改編等がなされても、新隊員教育の成果を基盤としてしっかり定着

させる形で、続く術科教育等がなされるのが望ましいとの思いが述べられた。

准曹会に対する贈呈式は、小笠原人教部長、野村教室長臨席の下、准曹会代表として杉本准曹会会長が参加され、田中個人訓練班長の司会により厳粛に執り行われた。

その際、小野理事長は、「ともすれば日米の協力・相互理解といえば、高級幹部によるものと認識されがちであるが、まさに日米の共同能力



Presentation ceremony keeping “social distance”

の根幹を担うのは准曹自衛官と米空軍下士官であり、その両者の交流は至って重要なことから、この訓練はJAAGAの活動趣旨に沿っておおいに称揚すべきものであると考える。今後ともこのような機会を更に充実され、日米空軍種の相互理解、交流を深めていただきたい。JAAGAとしてもしっかりと支援していきたい」と述べた。

これに対し、杉本准曹会会長からは、これまでの同訓練へのJAAGAの支援に対する感謝の念が伝えられるとともに、引き続き訓練の充実により日米の相互理解、共同運用能力を更に向上していきたいとの心強い意気込みが表された。

本年度最初となる日米相互特技訓練は、10月4日(月)から8日(金)までの5日間、空自那覇基地において、第4移動警隊(以下「4移警隊」という。)がホスト部隊として、嘉手納基地所属の米空軍人4名を受け入れ実施された。

4移警隊の受け入れ所感と、今回は2名の米空軍人からの寄稿を得られたので以下に掲載する。

今後の訓練については、空自側受入れとして岐阜基地、米空軍側受入れとして横田基地での実施が検討されているが、コロナ禍の状況を見ながら令和4年1月以降に再度日程が調整されるとのことである。

コロナ禍の収束と本訓練実施の正常化、更なる進展を祈念する。

(太田理事記)

所感 米空軍参加者を受け入れて 南西航空警戒管制団 第4移動警戒隊 2等空曹 川口勝広

10月4日（月）から10月8日（金）の間、那覇基地南西航空警戒管制団第4移動警戒隊（以下「4移警隊」という。）において、在日米空軍第18航空団（以下「米空軍」という。）を招き日米相互特技訓練が実施されました。4移警隊として米空軍を受け入れるのは初めてであり、不安と緊張の中4名の米空軍参加者を受け入れました。

初日は、午前米空軍参加者を全隊員で迎え、4移警隊長挨拶及び相互の自己紹介、部隊概要説明を実施し、午後からは、各職種の説明及び基地案内を行い、お互いの理解を深めました。最初はコミュニケーションがとれるか心配でしたが、次第に言葉の壁を乗り越え、打ち解けて和やかな雰囲気での訓練を実施できたと思います。



Team visits a historical site during a tour of Naha AB

2日目は、挨拶・掃除・身だしなみ励行週間であったため、4移警隊で実施した服装容儀点検を見学してもらいました。米空軍でも点検はあるものの、ここまで厳しくは行わないと言っていました。その後、第9航空団の支援を受け、特技毎に訓練を行いました。日米間で業務内容が通じる所もあれば、同特技でも全く異なる分野もあり、

多くの学びがあったようです。

3日目は、午前第56警戒隊及び第5移動通信隊を研修し、午後からは日本文化体験として、書道及び茶道を体験してもらいました。書道では筆を初めて使うため、参加者は苦戦していましたが、対番の隊員に筆の使い方を習い、各人が満足のいく作品を完成させることができました。茶道では日本の伝統に触れ、さらに抹茶や茶菓子を楽しむことができ、参加者から初めての経験で非常に楽しかったと言ってもらえることができました。



Deployment training

4日目は、午前機動展開訓練を見学し、午後から4移警隊員と一緒に体育訓練を実施し、ともに汗を流し親睦を深めました。その後、日本の伝統スポーツである柔道のデモンストレーションを見学してもらいました。参加者からの希望で、実際に立ち会いを体験する参加者もあり、大変好評でした。

最終日は、意見交換や南警団司令表敬、ギフトの交換、記念写真撮影を行いました。意見交換の中では、米空軍参加者から「4移警隊員を嘉手納基地に招待したい」、「体力検定を受検したかった」等の意見が挙がり、今後の日米連携や



“Communication equipment maintenance” training



Team visits 5th Mobile Communication Squadron



“Refuel” training



A tired and happy group pauses for a photo after a spirited Badminton tournament



An Judo expert prepares to throw a USAF member during a demonstration

相互理解を深めるための方法について話し合うことができました。

本訓練を迎えるにあたって、英語を上手く話せない等の不安要素がたくさんありましたが、毎日一緒に行動する事で、日に日にコミュ

ニケーションがとれ、絆も深まり、有意義な訓練になりました。また、メールアドレスを交換する隊員もあり、訓練後プライベートで交流している隊員もいます。

最後に、この日米相互特技訓練

を支援して頂いた那覇基地及び与座岳分屯基地の皆様には心より感謝を申し上げます。また、本訓練が日米相互において実りあるものとなったことを報告いたします。ありがとうございました。



Lt Col Onda and SMSgt Kumasaki of the 4th Mobile AC&W Squadron present a USAF supply member with a personalized unit shirt



A team photo concludes an amazing week of the NCO Exchange Program, hosted by the 4th Mobile AC&W Squadron

U.S. Airmen's impressions for Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange program

TSgt Gibson and TSgt Roth participated from 18th Air Wing

【Written by **TSgt Gibson** (ギブソン 2等軍曹)】

It was a great experience!
It was very unique and an awesome way to learn about each other's role in the fight, see career field similarities and discuss the differences.



On our end, something that would be beneficial for the JASDF members would be if participants created an introduction slide, as well as a slide with their units organizational structure and job description. Diagrams and pictures would make it fun and easier for them to understand. We briefed those topics day 1, but I think most had a hard time following along.

【Written by **TSgt Roth** (ロス 2等軍曹)】

It was definitely an awesome experience! Nothing was bad. They were very organized and great hosts! There were definitely some things I wish I would have known prior like TSgt Gibson stated; knowing the schedule of events and getting an explanation of each event could have helped us just be as prepared as they were. Furthermore we did several ceremonial events, which I would like to research the customs and courtesies prior. Overall, it was very informative. I didn't take anything back that I could specifically use in my job. However, I now know how they operate, which is great information, and good relationships and ties were definitely created and built!

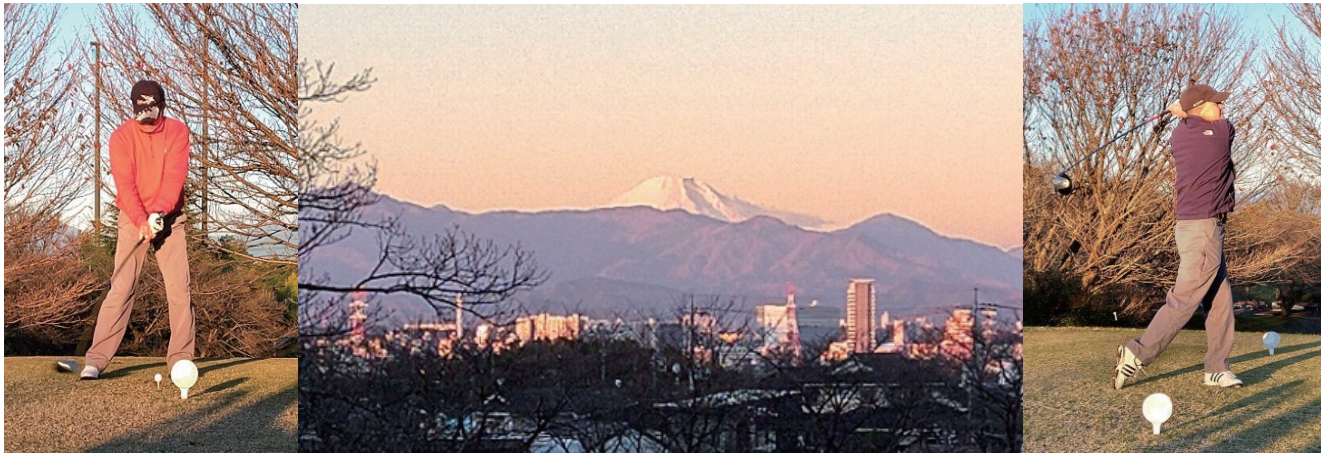


本訓練の空幕担当者が、9月に西ひとみ 1等空曹（第1輸送航空隊へご栄転）から瀬尾太佑 2等空曹に引き継がれた。瀬尾 2曹は、警戒管制特技で那覇基地及び沖永良部分屯基地に勤務されてきました。「一期一会」をモットーに、すべての出会いを大切に頑張るとのこと、今後益々の活躍が期待されるルーキーです。

(太田理事記)

SPORTEX '21-A

JAAGA holds SPORTEX '21-A, JAPAN-US friendship golf athletic meet on November 24



Snow-covered Mt. FUJI welcomes “BILATERAL SUPER SHOTS”



11月24日(木)、2年ぶりにJAAGAゴルフコンペ「SPORTEX」が多摩ヒルズゴルフコースにおいて開催された。

昨年はコロナ感染症の蔓延により実施できなかったが、今回は「ウィズ・コロナ」での実施を追求し、関係者の創意工夫によりこの日を迎えることができた。

「ウィズ・コロナ」での実施にあたっては、極力「密」を回避するコンペ形式とし、その中でも参加者が楽しくプレーして親睦を深め、全員が満足して帰ってもらえるように智恵を絞った。

「密」の回避には、これまで通例となっていたクラブハウスでの朝食、参加者が一同に会する開会式、競技説明及び記念撮影、プレー終了後のクラブハウスでの昼食及び表彰式を取り止めるとともに、競技形式を「ショットガン」方式(パーティー毎別々のホールから一斉にスタート)から、各人がスタートに間に合うように受付し「五月雨」式にスタートする方式に変更することとした。また、参加者間の交流・親睦が深められるパーティー構成に配慮するとともに、多摩ヒルズゴルフコースに関連した(まさにアメリカを感じる)参加賞を用意することに加え、パーティー毎の写真を載せた「参加証」を作成し、「スコア」とともに後日メール配信することとした。

前日は雨天であったが、富士の雪景色を望めるほど澄み渡った青空の下、杉山会長はじめJAAGA側42名(うち個人賛助会員6名、法人賛助会員6名、ボランティア2名)、第5空軍司令部幕僚長セトカ大佐(Col Dominic Setka)はじめ米空軍側19名(うちボランティ

ア1名)が、「密」を回避しつつ、和気あいあいとプレーを楽しみ親睦を深めた。

なお、競技結果は、キムさん(Mr. John Kim)が優勝(GRS 78 HDCP 6 NET 72)、中司さんが準優勝(GRS 95 HDCP 22.8 NET 72.2)、ベストグロス JAAGA側キムさん(Mr. John Kim)(GRS 78)、米空軍側はロフトンさん(Mrs. Yoko Lofton)とシルベイン中佐(Lt. Col Anthony Sylvain)(GRS 90)の2名であった。



Volunteer receptionists start work before sunrise (↑↓)



「ウィズ・コロナ」でのコンペ実現に尽力された理事各位、特に、早朝からの受付に始まり、プレー後のスコア集計まで運営を陰で支えていただいたボランティアの荒木(淳)理事、大岩理事、米側クレイグ軍曹(TSgt Kelvin Craig)、そして我々の要望を聴き入れ素晴らしい環境を整えていただいた多摩ヒルズゴルフコース関係者の方々に深く感謝を申し上げたい。次回からは、参加者が一同に会せる環境となり、更なる交流深化の機会となることを期待したい。

(太田理事記)

OUT START 27 Members 7 Parties

IN START 31 Members 8 Parties



米空軍（宇宙軍）将校 航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF (USSF) Officer Working in Koku-Jieitai

航空自衛隊幹部学校 教育部

Air Command and Staff College Education Division

Lt Col Phillip M. DOBBERFUHL

皆さん、はじめまして。または、ご無沙汰しております！ フィリップ“Flex”ドバフル中佐です。はい、まだ日本にいます。今、目黒の幹部学校で教官をしています。2018年7月に在日米大使館から目黒へ異動してきて、2022年の夏にまた異動する予定です。



Lt Col Phillip "Flex"
DOBBERFUHL

家族は、アメリカにいたる長女が結婚して、今年の1月に初孫が生まれました。長男はアメリカの大学生で、下の2人（双子）の次男三男は東京周辺のインターナショナルスクールの高校生で、最後の学年を終えようとしているところです。

経歴を紹介しますと、美空ひばりさんの曲ではないですが、曲がりくねった道を歩んできました。全てをここに書こうとするとスペースが大きくなり、皆さんにとっては面白くもないので、とても省略したバージョンでお送りします。空軍に入る前に経験した仕事：ドッグフードの輸入業（日本、卸売）、子供服（アメリカ、副社長 - 国際担当）、日本郵船（アメリカ、勤務中に国際複合物流業界の総収入において、世界6位から5位に躍進、私の努力がその要因の一つ^{注1}）、宣教師（日本、現代のザビエル）、市議会議員（アメリカ、社会を変える事なく隣り同士のけんかの和解役がほとんど）です。そしてその後、下士官として空軍に入隊し、しばらくして幹部になりました。特技として、宇宙運用士、宇宙開発エンジニア、そして、地域専門家を取得し、今年の7月、米国上院議会の承認を受けた直後に宇宙軍に編入しました。

海軍兵学校^{注2}やマンスフィールド・フェロー^{注3}、在日米

大使館などの勤務を通して、天皇陛下、総理大臣、官房長官、航空自衛隊の歴代幕僚長、宇宙政策委員会の委員の方々、JAXAの歴代理事長など、様々な政府や防衛、宇宙などの分野のリーダーの皆さんとお会いし、接する機会を授かりました。恵まれて、2008年の宇宙基本法、2+2にMDAとSSAを加える事、宇宙基本計画、航空自衛隊の本気で宇宙に取り組む活動^{注4}、そしてその他にも防衛省外の安全保障の宇宙活動にも携わってきました。

航空自衛隊幹部学校では、OEFやOIFなどの作戦経験^{注5}を活かし、AWC、CSC、AOC、SOC、合同共同教育、戦技課程などで授業を持たせていただいています。また、ATOサイクルなどの作戦系の授業のほかにCSCの英語



Giving a lecture at Air Command and Staff College students class

の授業も数時間受け持っています。特に、幹部学校にある航空研究センターで、戦略的思考を育成するためにウォーゲームの研究をしている事を聞き、学生達が簡単なウォーゲームを英語で行う授業を考案しました。さらに、『鵬友』に戦史から学ぶリーダーシップや米軍の給料と福利厚生、「文化能力の測定」や宇宙などについての記事を毎回書いています。皆さん、ぜひ読んでみてください！

少し真面目な話をさせていただくと、23年間にわたる宇宙の運用経験と普通では経験できない日本との関り（長さと深さ）があります。その経験に基づき、



Media articles on CSC students wargaming in English

そして現在、在日米軍人の中で安全保障における宇宙のトップエキスパートとして二つの提案をさせていただきます。①私のような防衛交換要員が7人ほど航空自衛隊にいますが、宇宙の作戦運用に関わる空自の人材を育成するため、空軍に限らず宇宙軍の交換幹部、又は連絡官を増やすべきです。②そして、これからは日本の早期警戒（米軍に（ただ）依存するだけではなく、独自の物）と衛星通信の分野が航空自衛隊を含む安全保障宇宙に関係する全政府機関にとって重要になるため、それに向けた準備（心がまえ、予算、知識・能力）をお願い申し上げます。

日本で好きだった場面や経験を分かち合いたと思います。その一つは、7月に宇宙軍に編入した時、その編入式が幹部学校

で行われました。米宇宙軍の作戦部長のレイモンド宇宙将からビデオメッセージをいただきました。また、幹部学校長の柿原空将と副校長の坂梨将補がお言葉をく



Video message from Chief of Space Operations, for Space Force induction ceremony

ださり、CSCの学生と教官から開会の祈りとアメリカ国歌を斉唱していただきました。新型コロナウイルスの対策をしっかりとった態勢で式場に集まったAWCやCSCの学生や陸海空の教職員の他に、オンラインで歴代航空幕僚長や日本各地・ハワイ・アメリカ本土などの友人、元同僚、親族などが参加して下さいました。複数のメディア会社の記事になり、幹部学校のSNS (Twitter) にも載りました。この様な大きな待遇は、私



ACSC's Tweet about US media reporting on USSF Oath of Office Ceremony at ACSC

ドバフルだったからという事ではないでしょう。その最大の理由は、宇宙が、地球が誕生するより遥か昔から存在

する最古の物理空間でありながら、現在、最も新しい競合領域になっており、幹部学校で働く初の米宇宙軍の士官になったからでしょう。

では、最後に石川さゆりさんのコンサートに行ったときの話をさせていただきます。会場のステージの両

端が観客席の方に少し出ていました。私の席は正面から見て左側の14列目くらいのところでした。コンサートが始まり、石川さんが歌いだし、とても素晴らしかったです。時々



Sayuri ISHIKAWA concert hall: my seat & her position when she nodded toward me

彼女が歌っている時に、会場の様々な所から「さゆり〜!」という叫び声が聞こえてきました。石川さんが歌いながらステージを左右に移動したりして、ステージの左側の出ている所、つまり私の席に一番近い所にきた時に、私もつい「さゆり〜!」と一生懸命叫びました。歌の途中でしたが、彼女は私を見てうなずいてくれました。大好きな石川さんと目が合い、あまりにもうれしすぎて気絶しそうでしたが、隣に座っていた妻は「やれやれ、この人知りません」という態度でした。

コロナが続く中、皆様とは石川さゆりさんのコンサートでお会いする事はないでしょうが、『鵬友』によって間接的に会うことができます。また逢える日まで、宇宙を向いて歩きましょう!



Q:好きな日本食
A:黒糖かりんとう

Favorite Japanese food = KARINTO

注1: その時期に国際複合物物流業界の総収入1位と3位の会社が合併したということもその要因の一つとみられている。

注2: 日本語を教える教官だった。(米海軍がいまだに日本語が出来ない事がこれでわかるであろう(笑)。)

注3: 「モーリーン・アンド・マイク・マンズフィールド・フェロシップ・プログラム」の略。長きにわたり駐日米大使を務めたマイク・マンズフィールド氏の名を冠した日米両国間の実務的な政府間研修プログラム。

注4: 例えば、準天頂衛星システムに米国のセンサーの搭載やASNARO、H3ロケットの開発等。

注5: OEF; Operation Enduring Freedom (通称アフガンスタン戦争)、OIF; Operation Iraqi Freedom とその前の作戦Operation Southern Watchは「イラク戦争」と一般的に呼ばれる。

航空自衛隊コーナー *From Koku-Jieitai*

ブルーインパルス 「東京2020オリパラ」を飾る！

Blue Impulse, the Koku-Jieitai's aerobatic team staged an aerial display for the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games



Blue Impulse staged an aerial display over central Tokyo. Photos show Blue Impulse flying over Tokyo Tower (left), Japan National Stadium (center), and Tokyo Skytree (right). Many people in and around the capital watched the spectacle from the streets or on the top of buildings

「第 32 回オリンピック競技大会（2020/東京）及び東京 2020 パラリンピック競技大会」（以下「東京 2020 オリパラ」）は、コロナ禍などにより開催も危ぶまれたが、2021 年 7 月 23 日のオリンピック開会式から同 9 月 5 日のパラリンピック閉会式まで、連日、日本選手団の目覚ましい活躍があって、日本国民のコロナ禍による閉塞感と溜まったストレスを晴らすように盛り上がった。そんな日本国民の興奮の中で航空自衛隊からは、東京 2020 オリパラ運営の各種支援（国旗掲揚、医療支援や会場整理業務等）に 1,000 名以上の隊員が参加した。特に、両開会式当日に東京都のランドマーク（東京タワー、東京駅、東京スカイツリー等）及び国立競技場上空において展示飛行を行った航空自衛隊



「ブルーインパルス」が大空に描いた色鮮やかなカラースモークが、東京 2020 オリパラ開幕の狼煙となり、多くの日本国民を勇気づけ、オリンピックムードを大いに盛り上げた。コロナ禍の対策として、観客の密集等を避けるために展示飛行の細部内容は事前公表されなかったが、大空に描いた五輪マーク等の展示飛行を自分の目を見た人々は、その貴重な経験を脳裏に焼き付け心躍らせたことと確信する。また、機上で忠実な展示飛行を完遂したブルーインパルスのパイロット達も、フライト後にその大きな反響に喜びつつ誇らしい任務の完遂に新たな任務遂行へのモチベーションを高めたことと思料する。

展示飛行において 1 番機を務めた第 11 飛行隊長遠渡祐樹（えんとゆうき）2 佐は、「オリンピックという大舞台で失敗できないので、チーム全員で気合を入れて臨んだ。このフライトで日本が元気に、そして参加選手の力になればという気持ちだった」と思い入れを

語った。また、「コロナ禍で展示飛行の本番がずっとできなかった。私も含め今回初めて本番に臨む者が何人かいたが、予備編隊のためにブルーインパルス経験操縦者を招集したお陰で様々な知識経験の継承ができたことは、今後のチームにとってとても有益だった」

と語った。

これらのエピソードは、まさに東京 2020 オリパラの基本コンセプトである『全員が自己ベスト』、『多様性と調和』、『未来への継承』を体現していたものであった。
(池田理事記)



Blue Impulse
Engine Start
作：宇山佳男 OB

女性戦闘機パイロットの活躍！
寄稿「レッド・フラッグ・アラスカ (RFA21-2) に参加して」
第5航空団 第305飛行隊 1等空尉 伊藤 美紗 (いとう みさ)



～筆者のプロフィール～

伊藤 美紗 (いとう みさ)

防衛大学校 58 期生

第 5 航空団 (新田原基地) 第 305 飛行隊所属

「平成 30 年 8 月 23 日、第 109 期戦闘機操縦 (F-15) 課程を卒業
航空自衛隊初の女性戦闘機パイロットとして日本の空を守る」

前号の「JAAGA だより 60 号 空自コーナー」に航空自衛隊における女性自衛官活躍の取組みについての記事を掲載したところ各所から反響があり、今般新田原基地の第 5 航空団から実際の女性自衛官の活躍についての記事を寄稿いただいたので紹介する。寄稿者は「航空自衛隊初の女性戦闘機操縦者」となった伊藤美紗 1 等空尉である。文面からは彼女の誠実さと積極進取の性格が伺えて、国防の任に就くにあたって頼もしく誇らしい航空自衛官であると感じた。
(池田理事記)

「レッド・フラッグ・アラスカ (RFA 21-2)
に参加して」

第 305 飛行隊

1 等空尉 伊藤 美紗 (いとう みさ)

第 305 飛行隊の伊藤美紗です。今年の 6 月、念願だったアラスカでの海外訓練に初めて参加し、大変貴重な経験をしました。今回寄稿の機会を頂きましたので、RFA21-2 の経験を紹介したいと思います。



Last chance check at Eielson AFB, Alaska

アラスカに渡航する約1か月前から、那覇基地の第204飛行隊での慣熟訓練を行いました。飛行前準備から飛行後のブリーフィングまで、一連の流れを海外訓練と同様に行い事前に訓練できたことから、実際にアラスカでのフライトにおいても、戸惑うことなく訓練に臨むことができました。



Getting pre-flight information before room out

アラスカでの訓練は、陸地上空の広大な訓練空域で行われ、上空からは遠くにデナリ山脈を望むことができました。国内では経験したことのない規模の大きな訓練でしたが、多くのアセットを統括してミッションを計画するミッションコマンダーの多くは私と同年代の操縦者でした。飛行時間は私とほとんど同じですが、大きな規模の訓練の計画を堂々と取り仕切る姿を見て、自分の見識の狭さを痛感するとともに、今後の自分の目標を見つけることができました。



Prepare for the de-briefing, after landing

そして、何よりも交友関係が広まったことが貴重な財産となりました。米軍の各飛行隊からも女性戦闘機操縦者が参加しており、そのうちの1人は防衛大学校時代の交換留学時の友人で、互いに戦闘機操縦者とし



Take off from Eielson AFB, Alaska

て再会できたことに感動しました。その友人はすでに実戦経験もあり、現在は、配偶者と同じ飛行隊に配属され、同じ編隊で飛ぶこともあるということを知ってとても驚きました。今回の訓練にご主人も参加されていたのですが、2人ともとてもプロフェッショナルな振る舞いだったため、言われなければ夫婦と気づきませんでした。



Discussing with A-10's female pilots during guided tour at the USAF A-10 squadron

今後、女性の戦闘機操縦者も増えるかと思いますが、操縦者としても周りから認められ、夫婦としても良い関係を築き、職場ではお互いが夫婦であることを周りに感じさせないプロフェッショナルな振る舞いを見習っていきたいです。また、戦闘機部隊に女性が配置されるようになり、女性隊員自体の割合も徐々に増えつつありますが、制度や設備の整備のみならず、男性女性関係なく仕事を続けられるような職場の雰囲気づくりがとても大切だと感じました。

米空軍コーナー

From 5th Air Force

今回は米第5空軍の記事を2件紹介する。

1件目は、太平洋空軍が実施した大規模な部隊展開作戦である「オペレーション・パシフィック・アイアン(Pac Iron)」において、嘉手納基地が、通信を提供する不可欠な役割を果たした記事であり、本訓練でも ACE (Agile Combat Employment: 迅速機敏な戦闘展開) が実施されていたようである。

2件目は、東京2020パラリンピックに参加する米国選手を第374空輸航空団(横田基地)が迎え入れ、大会に向け、万全を期して送り出したという記事であり、心温まるものである。(浅井理事記)

Pacific Iron 2021: A Fast, Flexible Force

<https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/2723571/pacific-iron-2021-a-fast-flexible-force/>

太平洋空軍(PACAF)の隊員は、2021年7月に行われたPACAFの大規模な部隊展開作戦である「オペレーション・パシフィック・アイアン(Pac Iron)」に参加した。



F-15C Eagle flies over Kadena AB, Japan, during Pac Iron



F-15C Eagle pilot prepares for flight during Pac Iron at Kadena AB

「Pac Iron」は、米国国防戦略2018(The 2018 National Defense Strategy)が軍に要請する「To be more lethal, adaptive, and resilient force」の裏付けとしてPACAFが米インド太平洋軍(USINDOPACOM)

管轄地域に戦力を展開させる機動部隊展開作戦である。

第18航空団の本拠地である嘉手納基地は、指揮統制センター(Command and Control operation center)を通じてPACAF全体の通信を提供する、この作戦に不可欠な存在であった。「我々はコミュニケーションと指揮統制に焦点を当てており、ヒッカムにいる部隊及び第2列島線内の遠く離れた部隊とコミュニケーションする能力を持っている」と、第18航空団ACE事務所長Tyler Studeman少佐は述べている。

C2ノード(指揮統制ネットワークの接続ポイント)はPACAFのミッションに不可欠な中央集約型



USAF service members assist in setting up antennas for communication operations during Pac Iron at Kadena AB

ハブであり、Pac Ironのすべての参加者間での通信と情報の配布を提供し、錯綜した状況下でオペレーションセンターを実現(再現)する。「C2面の実現(再現)は簡単。天幕を設営し外界から遮断し、そして、通常持ち出すセンサー、アンテナ、資材と再接続すればよい」と、C2ノードの代替運用班長David Tharp大尉は言う。C2は情報提供の目的上不可欠だが、それはまた、嘉手納基地のメンバーがACEトレーニング能力に磨きをかけることを可能にする。



USAF airmen set up a tent for a Command and Control center during Pac Iron at Kadena AB

息苦しくなるような沖縄の陽光の下ではあったが、勤務者は、天幕、緊急空輸可能な通信装置、発電機、空調ユニットで構成された

オペレーションセンターを数時間で設営することが出来た。これは、より俊敏な任務実施で、より効果的な阻止及びより弾力性の高い能力を持つように空兵を編成し、訓練し、修得させるための多種能力空兵課程 (Multi-Capable Airmen course) を通じて可能となった。



USAF airmen relocate heating, ventilation and air conditioning systems



USAF airman directs a forklift to pick up cinder blocks used for securing tents at Kadena AB

これは、ある職域の空兵を選び、他の職域分野で訓練することによって達成されるものであり、彼らが本来の職域外の任務に熟練するこ

とを可能にしている。

「ACE のコンセプトは、空軍が向かっているところ（場所）だ。だから、我々はそれを行う準備を整え、そこで最高の力を発揮することが重要だ」と、Tharp 大尉は言う。
(浅井理事仮訳)

Yokota hosts Paralympic athletes

<http://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/2745458/yokota-hosts-paralympic-athletes/>

第 374 空輸航空団（横田基地）は、8 月 11 日から 21 日までの間、東京 2020 パラリンピック競技大会に出場する約 70 人の選手を迎えた。



A U.S. Para track and field team member, runs during a practice session at Yokota AB

この期間は、選手に東京の気候や天候に慣れさせるだけでなく、時差に適応する機会を提供する。

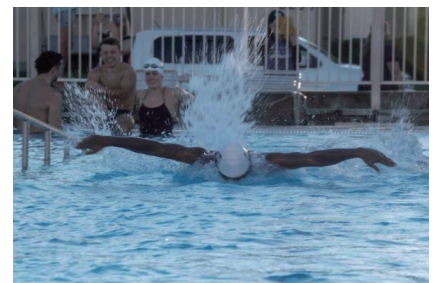
アメリカ代表チーム（チーム USA）の短距離走者で走り幅跳び

の Jaleen Roberts 選手は、「この期間は私たちに少し有利だと思う。時差ぼけと天候は、如何にパフォーマンスできるかに実際大いに関係する。選手村に行く前に、この機会を得たことにとても感謝している」と語った。

COVID-19 の問題と公共の安全のために、オリンピック委員会は東京オリンピックとパラリンピックの試合を延期することを決定した。



U.S. Para track and field team members practice at Yokota AB



A U.S. Paralympic swimmer, practices his butterfly stroke at Yokota AB

チーム USA 競泳の McKenzie Coan 選手は「昨年、私はコーチからの大会延期を知らせるメッセージで目が覚めた時、まさに打ちひしがれたが、人生で経験してきたあらゆる逆境を思い出し、広い心で受け入れた。さらに一年頑張っ、さらに強くなった」と言った。

選手が到着するのを待つ間、横田基地のメンバーは、チーム USA をサポートする準備を整えていた。

第 374 施設中隊の監督官である Charles Patterson Jr. 曹長は「2019 年から 2020 年初頭の頃には、かなり準備ができていた。このプロセスに血と汗と涙を流して努力してきた全ての人の全てのハードワークの結果として、選手たちが基地に来てトレーニングする姿をこうして見ることができ、安堵している。ようやくこうなったことに興奮している人がたくさんいる」と語った。

横田基地には 50 メートルの全天候プールがあるため、基地はもともと競泳チームをサポートすることだけを任務としていた。COVID による行動制限と予防措置が追加されたため、横田基地のメンバーは陸上競技チームを支援する新たな責任も受け入れた。選手たちは基地内の人たちとの接触を制限しなければならなかったが、それでも彼らの陸上競技と競泳の練習を公開することによって基地に感謝を示した。



U.S. Paralympic swimmer, finishes a practice lap at Yokota AB

「金曜日にここを去るのは寂しい。ここではすべてが愛をもって行われた。私たちの同胞が私たちに示してくれたのは愛、感謝、尊敬に他ならない。私たちは、彼らの善意に報いるために同じように最善を尽くした」とチーム USA 競泳の Jamal Hill 選手は言った。

軍事施設でのトレーニングは、選手がチーム USA に所属する 21 人の退役軍人をよりよく理解する経験となった。



U.S. Paralympians shake hands with an Airman

チーム USA の槍投げ Justin Phongsavanh 選手は「文字通りアメリカの最前線の防衛に身を置いた人たちとチームメイトであることは、信じられないほど素晴らしい。私たちのほとんどが決して見ることも聞くことも経験することもないであろう世界の他の側面について学び、成長する絶好の機会だ。また、彼らの人間としての成長に関われることも素晴らしい。退役軍人のいるチームの一員であることをうれしく思う」と語った。

選手たちはまた、基地映画館で質疑応答セッションを開催した。



U.S. Paralympians answer questions from various media outlets at Yokota AB

ある若い参加者は、彼が視覚障害のある泳者であることを明かし、



U.S. Paralympians answer questions from audience members at Yokota AB

オリンピックになることがどのようなものか選手に尋ねた。

チーム USA 陸上短距離の Nicholas Mayhugh 選手は「それは非常に信じられないほどの名誉と達成感だ。それが本当に何であるかを一步下がって見ようとしても、言葉が見つからない。自分の人生の全てをかけて何かに取り組み、ついに自分の名前の隣に榮譽を得ることができた…ただ信じられないほど素晴らしい感覚。言葉にするのは難しい」と答えた。



U.S. Paralympians pose in front of a C-130J Super Hercules at Yokota AB

準備期間が終わりに近づき、選手たちは 8 月 24 日からの東京パラリンピックに向けて横田基地を出発する準備を行っている。

(浅井理事仮訳)

賛助会員 投稿

Letter from Individual Associate Member

趣味の航空機写真撮影で米空軍に思いを馳せる

個人賛助会員 酒井 裕二

～ 筆者自己紹介 ～



千葉県君津市内に居住している個人賛助会員の酒井裕二です。東京都下水道局施設から排出される汚泥をカーボンニュートラルな発電用バイオ燃料に加工し火力発電所に供給する会社に勤務しています。後述の趣味がきっかけとなり、ご縁あって2005年に「日米エアフォース友好協会」の個人賛助会員となりました。以降、百里基地、館山航空基地及び木更津駐屯地のモニター制度に基づくモニターを逐次担うと同時に「百里基地後援会」、「館山市自衛隊協力会」、「木更津自衛隊協力会」の個人会員となり、一市民として自衛隊、在日米空軍の応援をしています。

1947年9月18日に創設された米空軍は今年で74年目を迎えました。始めに、米空軍の益々のご発展を祈念しお祝い申し上げます。加えて、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」開催に際しては、航空自衛隊ブルーインパルスによる競技大会オープニング・フライトを見て感動が込み上げてきました。飛行隊員はもとより、この取組みを担っていた航空自衛隊関係者の皆様に深く感謝します。さて、この度は「JAAGA だより」記載の投稿募集案内に応じて筆を取り、記した雑感を米空軍第5空軍への感謝と応援する気持ちを込め初めて投稿させていただきました。私は防衛・安全保障に関する専門的な知識を有しているわけではなく、乱文となりお見苦しいとは思いますが、お読みいただければ幸いです。

米軍は日米安全保障条約に基づき、尖閣諸島等島嶼部も含めた日本全域の防衛のために、様々な厳しい事態に備えていることと察しています。一方、中国は「領有権」に関わる独自の主張を始め、我が国の領海に軍艦相当の海警局の船を繰り返し侵入させたり、インド太平洋地域の広大な範囲でも空海軍が有する戦力を誇示して、地域の緊張感を高めています。インド太平洋地域の安全・安定を維持するために日米同盟を礎として、同じ価値観を抱く各国と連携して、自制を強力に求めることが大切だと思います。嘉手納基地の第18航空団においては、不透明な行動をする中国軍に対して、

航空自衛隊と連携した警戒監視を講じて、必要時には相応の対処力で臨んでいただきたいと思います。また、フランス、ドイツ、イタリア、イギリス、カナダ、オーストラリア及びインド各国の協力の下、各空軍の戦闘機も含めた航空機を使用した合同演習を嘉手納基地を拠点にして反復的に行い、中国軍をけん制することも有効と考えます。

ところで、私は陸海空自衛隊及び米軍の航空機あるいは艦船の写真撮影を予てから趣味にしています。新型コロナ禍の発生が無かった以前は、一般公開イベントで飛行する軍用航空機の撮影を目的にして、関東地方一円にある陸海空自衛隊施設や航空自衛隊の三沢基地・小松基地・築城基地、在日米軍の横田基地・岩国航空基地等に向けて度々展開していました。米空軍が参加するイベントにおいては、米国本土内外にある米空軍基地から飛来してくる機種を含めて一線級の様々な航空機の写真撮影とともに、英会話が苦手ではあるものの米空軍隊員との交流も楽しみました。2009年に開催された三沢基地航空祭では、見事な展示飛行を披露した米空軍が世界に誇る「サンダーバーズ」機を初めて撮影しました。会場で直にパイロットが頒布してくださった広報用パンフレットは、撮影した写真と併せて現在も貴重な記録として保存しています。また、2019年に開催した岩国航空基地フレンドシップデーで観覧した「The PACAF F-16 Demo Team 機」の機動

性は当然ながら、ヒッカム空軍基地所属の大型輸送機である「The PACAF C-17 Demo Team 機」の展示飛行を初めて観覧した際には、その機動性に驚愕したことを覚えています。

特に、「2018 年度横田基地日米友好祭」では、予てからひいきにし応援している第 18 航空団に所属する



HH-60G Pave Hawk of 33rd Rescue Squadron, 18th Wing

る「第 33 救難飛行隊」が運用する救難・捜索用ヘリコプター「HH-60G Pave Hawk」を目にして感激しましたが、会場で見かけた隊員も快く写真撮影等に

対してくださり嬉しく思いました。第 33 救難飛行隊のモットーは、嘉手納基地ホームページ記載事項によると、“That others may live” だそうです。戦場等の過酷な環境下で自分達が犠牲になろうとも、「他の人が生きられるように」という簡潔なモットーを掲げて人命救助の任務に日々臨んでいることと思います。このモットーにより、私自身にとっても勇気づけられる想いが感じられ、精強・強靱な第 33 救難飛行隊に以前から敬意を抱いています。日米友好祭当日の記念品として私が購入したパッチや T シャツ等の第 33 救難飛行隊グッズは現在も大事にしています。私にとっての「第 33 救難飛行隊」隊員との交流が可能な機会は、横田基地日米友好祭となります。2022 年 5 月に開催される予定の次回イベ

ントが、是非とも開催実現することを祈念しています。また、過去には参加実績がありますが、今後に予定される「那覇・嘉手納基地研修」にも可能であれば、改めて参加させていただきたく思います。

なお、私が愛用しているカメラ収納バッグには、第 33 救難飛行隊のスコードロンマークやシンボルマーク「JOLLY GREEN」と緑の足跡をデザインしたパッチを縫い付けています。因みに、私は嘉手納基地 SNS で第 33 救難飛行隊の他に第 18 航空団に所属する部隊の話題についても日々チェックしています。



The habitually used and treasured camera bag with several patches related to 33rd Rescue Squadron (JOLLY GREEN, green footprint, etc.) sewn onto it

今後とも、防衛・安全保障に関する事項並びに日米友好につながる様々な話題等について、JAAGA の皆様からご教示いただけることを切に願っております。

投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会 (JAAGA) は、お蔭様で令和 4 年 7 月で創立 26 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。『JAAGA だより』も、JAAGA 活動の広報と空白、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様 (会員に限らず現役隊員の皆様) からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

【連絡先】

(郵便) 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会 広報係

(メール) pubaffair@jaaga.jp

JAAGA 理事の活動紹介 「会員理事」

会員理事 山倉 幸也

私は、2019年4月、入会しほぼ同時に会員理事に就きました。私の視点で会員理事の活動について紹介させていただきます。

2021年10月末現在、今瀬理事、西村理事、野澤理事、私の4名で会員理事の業務を担当しており年間を通じ各理事が連携して活動しています。

今瀬理事は、筆頭理事として主として1佐以上の退職予定者を対象とした募集に関する業務、米軍基地研修における会員対応業務及び会員業務の横断的な事柄について担当しています。西村理事は、主として会員名簿の管理及び退会される会員への対応を、野澤理事は、正会員の入会手続き及びJAAGA バッジに関する業務を、私が賛助会員の入会手続きに関する業務をそれぞれ担当しています。

以下、会員理事の主たる職務である募集の状況と基地研修について述べます。

【正会員募集の状況】

正会員は、航空自衛隊のOBで、会の趣旨に賛同し入会を希望する方を対象としています。募集については、特に1佐、将官の退職予定者に力点を置いて募集活動を理事全員で行っているところです。活動の結果としては、昨年度から1佐の定年延長の影響もあり退職予定者の減少に伴い新規入会者が減少しています。入会されても再就職した会社のラインに入って現業を担うOBが増えてきたこと等により理事を引き受けてくれる新会員が少なくなってきたように思われます。このため長年、理事を務められた方に引き続き理事を務めてもらっている状況にあります。現在、各理事に募集の対象者を割り当てて、募集活動を活発に進めているところです。

【賛助会員募集等の状況】

2020、2021年度（10月末時点）の個人賛助会員の入会状況を見ても、入会者はともに0名です。2021年10月末時点で入会希望者が1名いらっしゃいますが、2019年度以前4年間の平均が9.3名であったことと比較すると入会者の減少が際立っています。コロナ禍において、昨年度からJAAGAにおいてもイベントを中止あるいは縮小し実施しましたが、航空自衛隊のみならず各自治体の行事、イベントなどが中止され、社会における様々な交流の機会が減少したことにより入会勧誘の機会が減少したことが影響しているように思われます。

一方、法人賛助会員の入会については、法人自体が対

外的な活動を制約している状況に鑑み、入会を希望されていても入会を留保される会社が複数社あります。また減益に伴う経費の見直し等により退会される法人が5社ありました。

我が国における経済活動が元気を取り戻し、行事、イベントによる人々の交流が活発化し、会員が会の活動についてアピールし入会を勧められる機会が増加し、入会希望者が増えることを期待したいと思います。

【基地研修】

基地研修においては、募集案内、参加者の選考、現地アテンド、研修後のフォロー等を業務としており、会員の皆様と直接触れ合う機会を頂戴しております。

担当は伊藤理事から今瀬理事に交代しております。会員の皆様におかれましては、本行事をたいへん楽しみにされていると認識しており、新理事も皆様との各種調整、現地での会話等を通じ、研修の充実と会員間の絆の強化に努めてまいりたいと考えております。募集案内におきましては各種書類等の提出でお手数をおかけしますがご理解のほど、よろしくお願いいたします。

【今後の活動】

私は2019年度、会員理事として11名の個人賛助会員の方及び1社の法人賛助会員の方と郵便、電子メール、電話により入会手続きをお手伝いしましたが、懇親会等の中止によりご本人とお会いできていません。これらの方々も含め会員の方々と協会のイベントにおいて交流できる日を心



Scenes of activity of Mr. Ito, the then chief Membership Director

(↑)Inaugural meeting of JAAGA Tour members in a friendly manner

(↓)Giving an onboard briefing on the plan of the day



待ちにしているところです。

会員理事の業務は、地味な活動ではありますが、各理事及び会員皆様の協力を得て会員理事が一致団結して活動

にあたり会員理事としての役割、使命を果たして参る所存です。引き続き会員皆様のご支援、ご協力をよろしく願います。

新入会員紹介

氏 名	住 所
池添 孝史	青森県三沢市

賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400 ～ 2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしております！

【法人賛助会員の皆様】32 社

株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、有限会社エイム、株式会社エクシオテック、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、新明和工業株式会社、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、株式会社日商ファインライフ、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、富士通株式会社、湧上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱商事株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレジジョン株式会社、株式会社武蔵富装、横河電機株式会社、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド

【団体賛助会員の皆様】2 団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

【個人賛助会員の皆様】87 名

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様のご協力が必要です。

投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」(男性にはタイピン、女性にはピンブローチ)を謹呈させていただきます。



「JAAGA だよりを私たちと一緒に作っていきましょう！」

JAAGA 広報係



会員募集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 1 名の入会を得ることができました。
- R3.11.30 現在、正会員数 254 名、個人賛助会員数 87 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 32 社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には、直接会員担当理事から連絡させていただきます。

【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊の OB

賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】

郵 便：〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 会員係

メール：membership@jaaga.jp

編集後記

今号「JAAGA だより 61 号」から編集長を務める福永です。だよりの発行を通じて現役隊員の活動をサポートし、航空自衛隊と米空軍の相互理解と友好親善の増進に寄与できるよう工夫していきます。掲載記事から、長引くコロナ禍の制約下、航空自衛隊と米空軍、そして JAAGA が出来ることに取り組んでいる姿を読み取っていただければ幸いです。だより発行に関わる皆様のご協力に感謝します。引き続き、あたたかいご指導お願いいたします。(編集長)

◆毎号いただいている挿絵「日々笑進」を座右の銘にして編集に取り組みました。(F)

◆東京 2020 大会ボランティアとして、様々な経歴の老若男女が同じ立場で知恵を絞り労力を厭わず大会の成功に貢献しようとする姿を目の当たりにしました。7 年半に及ぶ広報理事としてのボランティアもまた、人生の貴重な財産です。ありがとうございました。(K)

◆今号から JAAGA だより発送の宛先管理や配布調整等の担当になりました。細心の注意を払って作業しましたが、1,700 部を超える部数を扱うので嬉しい悲鳴を上げました。(I)

◆テレワークの普及等社会が変化するなかで、自衛隊や米軍の活動の報道に接すると大いに安心する今日この頃です。(A)

◆編集作業からは学ぶことが多く、指をくわえて見ていううちにあれよあれよという間に終わってしまいました。次号からはもっと力となれるよう努めます。(T)

◆久しぶりの多摩ヒルズ、「抜けるような青空、雪を被った富士、深まる紅葉」に感動！ 何より「周りを見られるようになった自分」に感動！！(O)



作：山本康正 OB

編集担当（広報理事）： 福永充史、木村和彦、池田五十二、浅井玲、竹内由則、太田徹

（※記名は編集長、以下 JAAGA 入会順）

JAAGA だよりは、JAAGA ホームページからもご覧いただけます（創刊号から第 49 号までは「20 年の歩み」に掲載）。

（JAAGA ホームページ：http://www.jaaga.jp/）